

文学博士間野英二氏の『バーブルとその時代』に対する授賞審査要旨

本書（松香堂、二〇〇一年二月刊）は、著者間野英二氏の『バーブル・ナーマ』に関する一連の研究（『校訂本』（一九九五）、『総索引』（一九九六）、『訳注』（一九九八））を締め括る成果である。『バーブル・ナーマ』（バーブルの書）とは、中央アジアのフェルガナ地方（現在のウズベキスタン）でティムール朝の王子として生まれたバーブル（Zahir al-Din Muhammad Babur（一四八三—一五三〇））が、その波瀾に満ちた四七才の生涯を回想した記録である。軍人であり、政治家であると共に傑出した文人であったバーブルは遠征を重ねた地域別に三部に分けて（第一部フェルガーナ（中央アジア）、第二部カーブル（アフガニスタン）、第三部ヒンドウスターン（インド））、歴史を動かした重要な出来事の顛末のみならず、当時の制度・習慣から地誌・伝記に至るまで鋭い観察眼をもって詳細に書き記していた。それ故『バーブル・ナーマ』は、一五・一六世紀の中央アジア史・インド史研究にとって極めて価値ある第一級史料として扱われて来ている。この書はバーブルの母語であるチャガタ

イ・チュルク語（古ウズベク語）で書かれており、独特の文体と生き生きとした描写によって、トルコ散文学の傑作としても高い評価を得ている。

『バーブル・ナーマ』の研究は、一八世紀にロシアで始められた。以来世界各地で新しい写本が発見される毎に漸次進展して来たが、バーブル自筆の原本は已に散逸し、現存する四種類の写本もペルシャ語訳本もいずれも完本ではなく、信頼できる校訂テキストを欠いていた。

その状況に新しい局面を開いたのが間野氏のアラビア文字による校訂本と総索引の刊行である。間野氏のこの業績は、ウズベキスタン共和国で高い評価を受け、一九九九年三月に同共和国からバーブル国際基金賞が与えられた。

著者間野氏は、羽田亨の文化史観を継承し、羽田史観の欠点とされた遊牧民とイスラーム社会に対する認識を改め、独自の新しい史観、即ち中央アジアの歴史は遊牧民の軍事力と機動力、オアシス定住民の経済力と先進文化という両者が相補的に共生共存する関係を軸に展開していたという史観を提唱していた。そのような見方を現地資料から実証しようとする著者にとって、『バーブル・ナーマ』は見逃し得ない絶好の資料であった。

前近代の中央アジア史を特徴づけた遊牧民と定住民化の著しい遊

牧民の間に見られる関係は、本書第三章第二章「チンギス汗とティムール 類似点と相違点」においても明確に論じられている。

チンギス汗とティムールという二人の英雄は、出自、生活様式、破壊行動において似ているが、都市をはじめとする定住社会に対する理解の程度に相違があったと言う。前者が草原型の遊牧民であったのに対して、後者は都市縁辺型の定住化への傾向を内包する遊牧民であった。つまり定住社会との関わり方の相違が両者の行動を方向づけたとする。チンギス汗の子孫もやがて定住社会との関わりを深めて行くにつれティムールの遊牧民へと変質して行くのである。そしてこの二つの型の比較研究が中央アジア史研究の重要な課題となると結論づけている。

同じ方向が、物資や富の調達方法の変遷にも如実に現れているのは誠に興味深い。中央アジアの遊牧世界から南アジアの定住農耕社会へと移動するにつれて、権力と暴力の行使による遊牧民的な粗野な略奪方式から権威と威儀による支配の方が有効であると悟ったバールは、北インドを支配下に置くようになると農耕民から地租として貨幣を徴収する方式へと転換して行く。バールの酒宴を開く回数が次第に増加している事実は、その徴税法が十分な定着化を見せていたことを推測させる。

王族を頂点としてこの時代に生きた遊牧民の日常生活の具体的な

様相と、それを支える社会的文化的基盤とくに制度、習俗、宗教のありように光をあて、たとえばイスラム教浸透後も宗教的基層をなしたシャーマニズムの働きや社会慣習の存在についての論及なども重要な指摘である。

日本の東洋史学には緻密な文献学的考証を重んじる伝統がある。間野氏の『バール・ナーマ』の研究は正にその伝統を受け継いで成功したものと言える。著者はチャガタイ・チュルク語、ペルシャ語、アラビア語の手堅い語学力をもって諸写本の校訂作業を行い、字句の確定、使用脈略を十分考慮して難解な土着文献の読解を完了した。なお不明な箇所は多く残されているものの、全体としては信頼できる訳業をなした。その訳業を基にして、時空共に未知の部分を残す中央アジア史の一五・一六世紀という時代にとくに着目して、王朝史を超えた『バールとその時代』というより大きい枠組を造り上げた。本書は文献学的研究と歴史学的研究を見事に結集させた成果と言うべきであろう。

跋に記しているように本書の大部分は既発表の論考を増補改訂し集成したいわば論文集であるため、全体に統一性を欠く嫌いがあることは否めないが、先行する諸研究を十分に踏まえて、且つ史料に即しつつ実証的な態度を貫いた本書は歴史研究の範として高く評価すべきである。